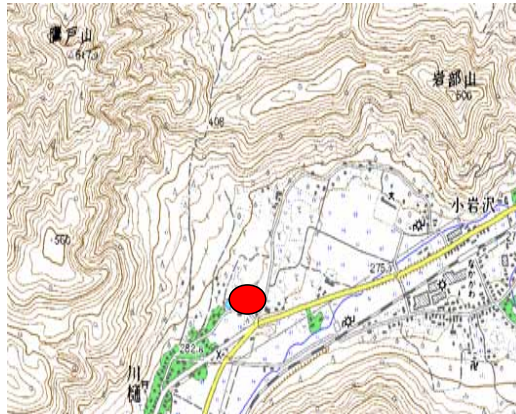


天矢場遺跡調査説明会資料

2007年11月2日（金）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査要項	
遺 跡 名	天矢場(てんやば)遺跡
遺跡番号	平成18年度登録
所 在 地	南陽市川樋字天矢場
調査委託者	国土交通省東北地方整備局 山形河川国道事務所
調査原因	一般国道13号上山バイパス改築事業
調査面積	4,500㎡
現地調査	平成19年5月17日～7月12日(前期) 平成19年10月1日～11月6日(後期)
遺跡種別	集落跡
時 代	縄文時代、中世・近世
遺 構	陥穴(土坑)・井戸跡・溝跡・掘立柱建物跡
遺 物	縄文土器・石器・陶磁器
調査担当者	調査課長 長橋 至 専門調査研究員 伊藤邦弘 主任調査研究員 須藤孝宏(調査主任) 調査員 伊藤純子
調査協力	南陽市教育委員会・置賜教育事務所



遺跡位置図



A区完掘状況【北東から】



C区遺構検出状況【北から】

1 調査(遺跡)の概要

調査は、一般国道13号上山バイパスの改築事業（中川工区）に伴う緊急発掘調査として行われました。昨年度、山形県教育委員会による試掘調査が行われ、本遺跡が確認・登録されました。その結果、事業区内の4500㎡について記録保存が必要となり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが国土交通省から委託を受け、発掘調査を行うことになりました。

調査区のほぼ中央を横切る道路の付け替え工事が必要としたため、この道路を境に東側半分を先行して調査した後、道路の付け替え工事の完了を待ち、西側半分を調査しました。前・後期調査とも東西に走るもう一つの道路を境に、便宜上北側からそれぞれA・B区、C・D区の2区画に分けて、①重機による表土除去、②遺構検出、③遺構精査、④記録という工程で調査を進めました。

2 立地と環境

天矢場遺跡は、JR中川駅から西へ約500mのところ、南陽市北東部の川樋地区に位置しています。川樋地区は北西の白鷹丘陵と東方の出羽山地に挟まれた、谷状の地形をしています。本遺跡はこの谷状になった地形の西側に位置し、標高は258m程です。調査前は、宅地および畑地として利用されていました。

川樋地区を含む中川地区には、諏訪原・元中山日陰・小岩沢・日向・長次郎・一ノ倉山・岩谷堂などの縄文時代中・後期を中心とする遺跡が点在することが以前から知られていました。また、天矢場遺跡の北側に隣接する、加藤屋敷遺跡では昨年度から2年間に渡って発掘調査が行われ、奈良・平安時代の土師器や須恵器が多量に出土するとともに、縄文晩期のもものと思われる竪穴住居跡が確認されるなど、大きな成果が得られています。さらに、江戸時代の史跡としては、金毛和尚によってつくられた岩部山三十三観音などがあります。

3 遺構と遺物

検出された遺構には、陥穴をはじめとする土坑・井戸跡・溝跡（畝状遺構）・掘立柱建物跡等があります。

陥穴と推測される土坑は、B区西部に合計4基検出されています。大きさはいずれも約1.5m×0.8m程で、検出面より底面のほうが広く掘り込まれています。いずれも向きを同じくした状態で、3～4mの等間隔を置いて配置されています。遺跡の北西に位置する白鷹丘陵から、同じく南東に位置する前川の水を飲みに降りて来る動物たちを捕まえようとして、ここに掘られたものと推測されます。陥穴の可能性のある土坑はこの他にC区南東部でも数基検出されています。

井戸跡は標高の低いA区東半部を中心に合計8基検出されています。井戸枠の施されたものは無く、全て素掘りのものですが、井戸の形状は多様で、底面を大型の石で固めたものもあります。大きさは検出面の直径で約2m～1m30cm、深さが70～60cm程です。底面からは、遺跡の北西側に位置する白鷹丘陵に降った雨が伏流水となって湧き出しており、井戸が利用されていた当時から豊かな水を確保できていたことが分かります。縄文土器片や須恵器片さらには木の繊維質などが出土した井戸跡があり、これらの構築年代は多岐にわたる可能性があります。

溝跡はA区東半部・C区・D区西部で検出されています。北東から南西に向けて構築されたものが多く、何らかの共通性を感じ取れます。立地上の影響もあるでしょうが、構築時の道路の傾きや、区画の傾きを反映している可能性もあります。埋土から縄文土器片や石器が出土したものと、陶磁器片が出土したものがあることから、これら溝跡の構築年代も、縄文時代と中世・近世に分かれるようです。

柱穴群は比較的高い標高の北側（A区北西側からC区北東側）に密集しており、遺跡全部でおおよそ1500基になります。現在3棟の掘立柱建物跡を確認していますが、この他にも検出できると考えられます。B区では、中央に2間×2間の縦柱建物跡、北西角に3間×1間の建物跡の合計2棟、C区では西側に3間×1間の建物跡1棟を検出しています。遺物が出土していないため時代の特定はできませんが、柱の間隔や構造から中世・近世のものであると推測されます。

遺物は、縄文時代・古代・中世・近世の各時代のものが出土していますが、出土数は少量で、大半は破片です。縄文土器は中期中葉のものが中心ですが、早期末葉の条痕文土器や後期の瘤付土器も若干見られます。石器は石鏃や円盤状石製品等が僅かに出土しています。古代の遺物は、須恵器の甕とこね鉢の破片が2点のみ出土しています。中世の遺物は、笹神狼沢窯の甕・ロクロかわらけ・竜泉窯青磁碗・景德鎮青花皿など数は少量ながら、史料的価値の高いものが出土しています。近世の遺物は、岸窯の播鉢や初期伊万里・肥前の染付等が出土しています。全体の出土数の比率としては、縄文土器片が最も高くなっています。

4 まとめ

天矢場遺跡は、試掘段階では平安時代の集落跡と考えられていましたが、現時点ではむしろ縄文時代の狩猟の場、加えて中世・近世の集落跡であったと捉えるのが妥当であろうと思われます。

本遺跡の所在する中川地区は、かねてから縄文時代中期から後期にかけての遺跡が点在し、特に石族等の狩猟用具が多く出土することで知られていました。今回の調査で陥穴群が検出されたことで、遺構と遺物の両面からこの地域が縄文時代に狩猟の場として利用されたことが実証されたと言えます。

中世・近世の中川地区の様相については、未だ明らかでない部分が多くありますが、今回の調査で出土した遺物から、僅かながら周辺地域との交流の手掛かりが得られたと思われます。詳細については、今後調査を進め、報告書にまとめていきたいと考えています。



出土遺物（縄文土器）



出土遺物（古代・中世・近世）



出土遺物（石器・石製品）

縄文土器出土状況

天矢場遺跡遺構配置図

(S=1/400)



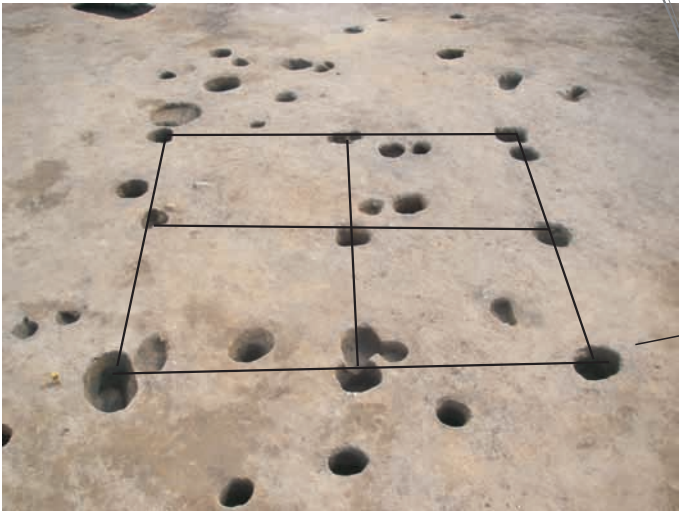
掘立柱建物跡 (SB1500)



畝状遺構 (SD1675~1680)



井戸跡 (SE1123)



掘立柱建物跡 (SB100)



陥穴 (SK7. 8. 98. 11)



井戸跡 (SE151)



井戸跡 (SE1110)



井戸跡 (SE1023)

